

母・ていは1963年の交通事故で意識が戻らぬまま74歳で亡くなった。高度成長期に自動車産業が発達し、交通事故が急増していた。救急医療や損害補償の矛盾を告発する論文を次々と書いた。

母は頭を強く打ったにもかかわらず、運び込まれた病院に脳外科がなく適切な手術を受けられませんでした。手探りで交通事故問題を勉強し始めました。資料などなく歩き回って話を聞



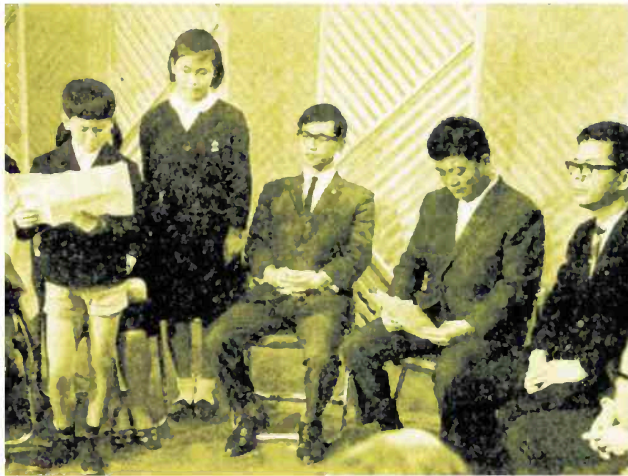
くしかありません。相変わらず収入はなくバス代にも事欠く日々でしたが、以前よりはるかに充実感がありました。母のために交通被害を明らかにする使命感に燃えていました。母の死が怠惰な私を鍛え上げたのです。

医師にインタビューをして回り、救急車にも同乗させてもらい搬送現場を取材しました。1年半を費やして分かったのは、交通事故死の大半は頭部の負傷が原因でありながら脳外科医の

③ 遺児の心にかける虹

あしなが育英会会長 玉井 義臣さん

被害者救済に執念 交通戦争を斬る



交通遺児が朗読した詩が世論を動かした
(右端が玉井さん)

絶対数が足りず、救急体制が機能していないという実態でした。適切な処置を受けられず、後遺症に苦しむ人も多く取材しました。

母の死後、加害者との補償交渉でも悔しさを味わいました。話し合いが難航した末に、母の「命の値段」は治療費や葬儀代

も含めてわずか100万円でした。母の死を不当に安く評価されたという憤りから、弁護士や裁判、保険会社などを取材しました。浮かんできたのは被害者不在の補償制度でした。

交通評論家として「交通犠牲者」を出版。姉とおいが飲酒運転に巻き込まれて亡くな

り、交通事故遺児を励ます会を立ち上げた岡嶋信治さんと遺児の支援活動を始めた。

テレビや新聞などから声がかかるようになり、メディア出演や執筆で忙しい日々を送るようになりました。67年に私の本を読んでくれた岡嶋さんと出会い、交通事故の被害者救済に執念を燃やす者同士で瞬時に通じ合いました。

都内で初めて街頭募金をして、有志の若者らと声をからして8日間で30万円を集めました。このお金が後の奨学金事業の核となりました。遺児の家庭を調査すると、多くは貧困で、母親らは「せめて高校は卒業させたい」と切望していました。

テレビ番組で10歳の遺児が「天国にいろおとうさま」との詩を朗読すると、視聴者から電話が殺到。国は交通事故遺児の調査に乗り出し、超党派で財団法人「交通遺児育英会」の設立を閣議決定した。

「死んでしまった／おとうさま／もう一度会いたい」。遺児がこう朗読した番組に出演していた私には、全国のお茶の間からスタジオに涙が逆流してくるように感じました。

世論が政治を動かしました。私は資金集めに奔走。女優の吉永小百合さんといった著名人のショーなどを重ね、全国に奨学金を届けました。70年代のオイルショックなどで不況になり財源が底を突きかけた時、匿名で毎月のように現金書留を送ってくださる1人の篤志家の存在を思い出しました。遺児を継続的に支える教育面での里親を増やしたいと「あしながおじさん」の奨学金制度を発表しました。